九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

メキシコへの旅 ： さまざまな文化と物語が交叉する世界へ

矢原, 徹一
九州大学持続可能な社会のための決断科学センター ： センター長

https://doi.org/10.15017/1792168

出版情報：決断科学. 2, pp.12-17, 2016-12-31. 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター
バージョン：
権利関係：

メキシコへの旅

さまざまな文化と物語が交叉する世界へ

矢原　徹一
生態学・進化学

言うまでもなく、メキシコは太平洋の対岸にある。したがって、メキシコを訪問するには、空の旅をすることになる。私たち九州大学決断科学の実習チームは、成田からサンフランシスコを経由して、メキシコシティへと飛んだ。サンフランシスコまでは約９時間の長いフライトではあるが、日付変更線を横切って飛ぶので、成田を１７時１５分に出れば、同じ日の午前９時３０分にサンフランシスコに到着できる。時差はマイナス１７時間、つまり成田を発ったのはサンフランシスコ時間の０時１５分だった。そしてサンフランシスコからメキシコシティへは約４時間のフライトである。私たちはサンフランシスコを１３時０８分に発ち、メキシコシティには１９時１８分に到着した。時差は＋２時間、つまりサンフランシスコを発ったのはメキシコ時間で１５時０８分だった。長い旅だが、それでも同じ日のうちにメキシコシティにたどりつけるという事実は、驚異的だ。

のちほど詳しく紹介するが、明治初期にメキシコに移住した日本人は、約一カ月かけて、太平洋を船で渡った。その旅は、ときに命がけだった。この１００年の間に、人類の生活は大きく変化したのだ。しかもその変化はさらに加速している。

今回のメキシコ実習を企画した矢原にとって、メキシコは１０年ぶりの訪問だった。メキシコ国際空港に降り立ち、入国審査を待つ列に並ぶと、まず空気がきれいであることに驚かされた。１０年前のメキシコシティは、大気汚染がひどい都市として有名だった。空港に降り立ったとたんに、すこし空気が匂った。また、埃が多いためにすぐにくしゃみが出た。当時のメキシコでは、くしゃみが日常であり、くしゃみをするたびにサルー（おめでとう）と言いあうのが習わしだった。しかし今回の旅では、くしゃみをしたのはほんの数回だった。この程度の頻度なら、日本で暮らすのと変わらない。

入国審査のフロアも１０年前よりずっときれいだ。メキシコという国の発展を肌で感じた。訪問者は以前よりも多く、入国審査の列は長い。コの字型の待ち行列を数えると6列に及んでいた。待ち時間は1時間を超えそうだ。そこでポケットからｉＰｈｏｎｅを取り出し、メールのチェックを始めた。いくつかの重要な連絡に返事をしているうちに、入国審査を待つ時間はあっという間に過ぎた。この点も、１０年間の大きな変化だ。１０年前には、ｉＰｈｏｎｅはなかった。インターネットのローミングサービスを受けるには、ノートＰＣを電話機用のモジュラージャックにつなぐ必要があった。フェイスブックもツイッターもなかった。今回の実習では、学生が毎日、フェイスブックの非公開グループに写真入りのレポートを書いた。写真の多くは、携帯電話で撮影したものだ。

このような時代の急激な変化の中にあっても、メキシコに暮らす人たちが作り上げてきた文化はしっかりと現代に引き継がれている。たとえば入国審査フロアの壁にはメキシコらしい壁画が描かれていて、楽しい。この壁画にはピラミッドや石像の絵だけでなく、トランクやドライヤーなど現代のインテリアを描いた絵もあるが、そこに描かれた空間、色、線、形、そのすべてにメキシコのデザインが感じられる。メキシコの魅力のひとつは、このようなデザインのユニークさと豊かさだ。メキシコにおけるデザインのすばらしさを実感したければ、メキシコ人類学博物館を訪問するのが良い。メキシコ人類学

博物館一階のフロアには、巨大なピラミッドを建造した古代のテオティワカン文明から、スペインによる征服直前に栄えたアステカ文明までの歴史が、多くの石像や装飾品、陶器などとともに紹介されているが、その数々の展示品のデザインの独創性には圧倒される。また、日本の5倍の面積を持つ国土の北（バハ・カリフォルニア）から南（オアハカやユカタン半島）に至るまで、さまざまな土地に発達した文化とそのデザインの多様性に目を見張らされる。しかしこれらの文化のすべてが、1521年に始まるスペイン征服によって途絶えた。

スペイン征服は、破壊とともに創造をもたらした。メキシコ人類学博物館二階のフロアには、スペイン征服後に生まれた先住民の独自の文化が展示されている。このフロアもやはりデザインに満ちているが、大きな違いは音楽や踊りに関連する展示が増えている点だ。スペインによる征服は、ピラミッドを含む多くの伝統的な建築物を破壊したが、一方でバイオリンなどの楽器や、キリスト教とむすびついた音楽を先住民にもたらした。その結果、メキシコ各地で新たな「先住民文化」が花開いた。この「先住民文化」を担ったのは、厳密な意味での先住民だけではない。スペインからの移住者と先住民との結婚を通じて生まれた二世・三世たちもまた、新しい文化の担い手だった。メキシコは、肉体的にも文化的にも、モンゴロイド系のネイティブ・アメリカンと、ヨーロッパ系のスペイン人との混血と融合の上に成り立っている国なのだ。さらに、スペイン人が連れてきたアフリカ系の人たちも混血に参加している。日本人は、世界を西洋と東洋に分けて考えがちだが、この視点は世界の現実を正しく反映してはいない。メキシコを知れば知るほど、その思いが強まる。

16世紀から17世紀にかけてスペインの統治下にあった地域は、現在の合衆国の一部から南米チリにかけて、南北に広がっていた。一方で、フィリピンもまたスペインの統治下にあった。ここに一枚の地図がある。

メキシコ国立自治大学の有村理恵准教授が、セミナーで紹介してくださったものであり、伊達政宗がスペインに送った支倉使節団がたどった航路を描いた地図である。太平洋の航路は、フィリピンのマニラとメキシコの

UNAMの有村先生による
東洋と西洋を繋ぐメキシコの交易ルートの解説

撮影　矢原　徹一

アカプルコの間で結ばれている。また大西洋の航路は、メキシコのベラクルスとスペインの間で結ばれている。ヒスパニック世界と呼ばれるスペイン統治下の地域は、フィリピン・メキシコ・スペイン本国を結ぶ横軸と、北米・中米・南米を結ぶ縦軸で結ばれていた。そしてこの十文字の中心に位置していたのがメキシコだ。

そのメキシコとフィリピンの間を航海していた船が日本に流れ着いたことが、歴史を通じて二回あった。一回目は豊臣秀吉の時代、そして二回目は徳川家康の時代である。ヒスパニック世界と日本の一回目の遭遇は、悲劇を生んだ。フェリペ号に乗船していた宣教師サン・フェリペ・ヘススは捕えられ、長崎で処刑された。彼の処刑の様子は、出身地であるモレロス州クエルナバカ教会の壁画に描かれている。二回目の遭遇は、友好を生んだ。千葉県御宿に流れ着いた三艘に乗船していた約270人のメキシコ人は、徳川家康から丁重なもてなしを受けた。そして改修あるいは新造された船によって、メキシコへと戻ることができた。この二回目の遭遇は、伊達政宗による支倉使節団派遣へとつながり、今日にいたるメキシ

コと日本の友好の出発点となった。しかしながら、その後江戸幕府が鎖国政策を採用したため、メキシコと日本の交流が再開されたのは明治初期のことである。

その後およそ１４０年の時を経て、私たちはメキシコの地を踏んだ。そこで知ったのは、メキシコ実習参加者のひとり、仲野美穂さんが改修に関わった長崎市西坂公園がサン・フェリペ・ヘスースの処刑地であり、西坂公園に立つ２６聖人像の一人がサン・フェリペ・ヘスースその人であるという驚くべき事実だった。有村理恵准教授はセミナーでかつての西坂公園の写真を見せてこの事実を紹介してくださった。この事実に驚いた私は、決断科学プログラム教員である高尾忠志さんによるフェイスブックの記事を切り出してスクリーンに投影し、仲野さんに説明を依頼した。仲野さんは、改修された公園の写真を使って、公園改修にあたっての高尾先生のコンセプトを紹介し、自らこの改修に関わった経験を語ってくれた。決断科学プログラムの取り組みと、メキシコの歴史が奇しくも交差した瞬間だった。九州大学持続可能な社会のための決断科学センターでは、長崎市と学術交流協定を結び、長崎市内のいくつかの現場で、景観デザインに関わっている。西坂公園はそのような現場のひとつだったのだ。何というめぐりあわせだろう。

このめぐりあわせの結果、私たちはメキシコの歴史や文化をはるかに身近に感じることができた。そして、すぐに本書のアイデアが具体化した。これから述べていくように、私たちの実習は明治時代のメキシコ移民に始まる物語を、さらに先に進めることを意図して企画したものだった。その物語に、西坂公園をめぐるもうひとつの物語がつながった。その物語は、一方では豊臣秀吉の時代にさかのぼり、他方では長崎市の未来へとつながっている。このふたつの物語を軸にしながら、メキシコと日本との関わりをふりかえってみよう。さらに、メキシコ実習を通じて得た経験と知識をもとに、これからの日本と世界のあり方を考えてみたい。もちろんこの問いに唯一の正解はないが、日本と世界を日本ではなくメキシコから眺めることによって、これまでとは違ったビジョンが浮かび上がってくるだろう。

矢原徹一　やはら　てつかず

九州大学教授　持続可能な社会のための決断科学センター長

1954 年福岡県生まれ。京都大学理学部卒。
東京大学助手、助教授を経て 1994 年より九州大学教授。
専門は生態学・進化学。著書に『花の性』『保全生態学入門』（共著）ほか。